今月のおすすめ本

『ロンドンの片隅で、この世界のモヤモヤに日々クエスチョンしているよ。』【914.6/ク】
クラーク 志織/文・イラスト(2024)平凡社

本書は、2012年からロンドンに在住している筆者が、日々の生活の中で思い悩んだことをクエスチョンしたことを肩肘張ることなく正直に綴ったエッセーです。
自身のフェミニズムに対する考え方の変化により、普段の生活でモヤッとしたとき「フェミニズム・モーメントだった」と気軽に言えるようになった筆者は、ボディイメージ、アイデンティティ、人種の多様性、温暖化問題、資本主義の問題点などについて考え、自らも日々様々な間違いをしていると述べています。このような己の矛盾を見つめ直すのに伴う気まずさ、この「居心地の悪さに慣れ」もがいていくことが大切で、一人ひとりの「なにかを変えたい」というパワーの集合体で社会は動くのだと言っています。自信がなくても「変わりたい。変えたい」と思う気持ちがすべてなのだと。
なかなか「フェミニスト！」と強く言えず、自分を変えていくときの不安な気持ちを楽にしてくれる、そんな一冊です。

イギリスの日常から差別を考える本
『ぼくはイエローでホワイトで、ちょっとブルー』【376.333/ブ】　ブレイディ ミカコ(2019)新潮社

『わたしを忘れないで』　【726.1/カ】
アリックス・ガラン/著、吹田 映子/訳(2023)太郎次郎社

おばあちゃん子だったクレマンス。いまは老人ホームに入っているばーばが逃げた、と母から知らせが来た。認知機能の低下が進んだばーば、「パパとママが心配するから帰りたい」というばーばの家、ばーばお気に入りのセーターも、私の事も忘れてしまう…。4度目の脱走を阻止するための投薬を振り切って、クレマンスはばーばと一緒にその家を目指す。
この本はフルカラーのバンド・デシネ(フランス語圏の漫画の呼称)で、やさしい色合いと軽やかなラインが印象的です。果たしてばーばとクレマンスは思い出の家に辿り着けるのか。まるでロードムービーを観るような本書は、老い、セクシュアリティ、家族について考えさせられます。
ばーばの摘んだ花、花言葉は何？

同じようなバンド・デシネ形式の本
『博論日記』【726.1/リ】ティファンヌ・リヴィエール/著、中條 千晴/訳(2020)花伝社
博士論文を書く院生の悲喜こもごも。果たして論文は完成するのか？！